



香川正雄氏

“足立地区への転勤”

三宅でいる間、藤沢さん宅にダンス等を預かってもらっていたので、三多摩方面への異動を期待していたが、後任者の結婚式の都合で一カ月延びて5月異動となる。

4月なら任地を選択できたが、単純な相対異動となり足立地区に決定する。

一週間程、送別会が連続であり、感謝されながら三宅を後にし、足立地区普及所へ重い足を運んだ。

足立普及所は農協に居候しており、しかも、その農協本店が改築中であり、伊興支店の方に仮住まいの事務所があった。

藪本所長、今井氏、小林（五郎）氏と自分の4人世帯だった。

中央線で国立駅から神田駅まで、山手線で上野駅まで、常磐線で北千住駅まで、更に、東武線で竹の塚駅まで行き、片道2時間、往復4時間の通勤地獄を体験することになる。

国立の藤沢さんの方も、事情がすっかり変わり、4軒長屋の一間に入ることになったが、土地を売り払い園芸の仕事もなくなっており、思い切って足立の方へ引っ越すことにする。所長の口利きで、伊興本町の「横山荘」という農家が経営するアパート（3畳と6畳）に入る。

家賃10,000円也で、敷金と礼金をサービスしてもらおうが、隔遠手当（20%）がなくなり、その上、家賃が5、6倍アップしたわけで、一気に耐乏生活を余儀なくされる。

当時の農協は、金融事業拡張期の全盛時代に入ろうとしており、特に江東三区では、水田の埋め立てによる宅地造成が始まりだした頃で、洪積台地畑の二の舞を歩みだした時期でもあった。

その後、農協も指導事業撤退時期となり、これが最後で普及所も分室も、農協から撤退することになる。

言われて見れば、経済団体に付属したような普及事業は奇怪しいもので、以後、区市町村に事務所を置く程度に留まった。

★ 江東三区では、水田の埋め立てによる宅地造成が始まりだした＝

江東とは隅田川の東と云う意味で、農業の視点で江東三区とはに隅田川の東で農地がある区の、江戸川区、葛飾区、足立区の事で、水田が相続等で造成され住宅が建つと生活排水が農業用水に流れ込み、稲作が出来なくなり、一気に水田は畑に代わり、宅地造成も始まり、現在では荒川水系では水田は無くなってしまった。

“東西分担制の活動”

江東三区の農業は、軟弱野菜と米の複合型で単純な技術に思えたが、それぞれ中味は濃厚なものがあった。

足立区に4名もいたので、所長が「稲作」、今井氏が「花井」担当ということで、小林氏と自分が「野菜」と「青少年」を担当し、しかも日光街道を東西に分け、東の方を小林氏、西の方を自分が受け持つことになる。

何故か区部は、総体的に農協青年部の組織がしっかりしており、その活動を普及事業が支援する体制となっていた。

足立農協青年部は50～60人の部員がおり、都の中でも全盛時代を築く、華々しい活動をしていた。

西部の方は、葉じそ、花じそ、穂じそ、アサツキ、芽じそなど「つまもの」の生産農家が多く、その他では、枝豆、ベカ山東、小松菜、春菊等が主要野菜だった。

東部の方（小林氏）は、キュウリ、ナス等果菜類があったが、西部はなく、技術的には、多少淋しい思いをした。

花卉の方も、門前の小僧で、露地の夏菊にはじまり、チューリップやフリージア等の超促成栽培、クレマチス、地掘物（パンジー等）生産を見聞できた。

この時の二分担制は、小林五郎さんとの名コンビぶりを発揮することになり、後に、農業経営の専技になっても、すぐ一年後に、小林さんが野菜の専技を担当することとなる。

また、普及担当副参事のときは、彼は普及所長といった具合で、いい意味でのライバル関係が続き、遊びも仕事もお互い協調して取り組んできた。

本当にいい職場の友人に恵まれたことに感謝したい。

★小林(五)氏=、小林五郎氏のこと、昭和9年11月生まれで、東京農工大学卒、昭和33年農業改良普及員。 命日は令和4年8月17日逝去 享年88歳。

★西部の方とは、栗原地区で、つまもの生産農家が多い。

<http://edoyasai.sblo.jp/article/65261455.html>



★小林五郎さんには、「伝統野菜は長老に聞け」で講師を務めていただいた。

<http://edoyasai.sblo.jp/article/102754679.html>

“体力づくりの全盛”

足立農協青年部は、小林さんのようなスポーツマンの指導者に恵まれたせいか、都の農業青年組織のソフトボール大会に連続優勝したり、体力づくり大会（陸上）でも好成績をおさめ、衆目の的となった。

当時は、江東三区の農協青年部の運動会があったり、足立だけでも、バレーボールやボーリング等の練習を部活動として年中行っていた。

日常生活の中でも、昼休みや勤務後に、農協の若い職員と卓球やバレーボール、ボーリングをして体力づくりと親睦を深めていた。

このお陰で、4時間の通勤時間の疲れどころか、事務所へ出勤するのが楽しかった。

学習する青年からスポーツを遊ぶ青年に育成させことは、普及所として、全国的にも誇れる異例の活動だったと思う。

八王子と同様、青年とのつながりは、今もって深い絆となって、心の中に残っている。

★都の農業青年組織=、東京都農協青年組織協議会で東京都農協中央会が事務局を担っていた。

★当時の足立区農協青年部の荒堀安行さんは、香川さんの言葉が印象に残っていると「国の政策として農地の課税強化の時代に、今農地を売ることは考えないで、我々が定年退職するのと同じように、農業ができなくなった時に考えよう」と農協青年部の会議で語ったという。



<http://edoyasai.sblo.jp/article/162713466.html>

この荒堀さんは農協青年部の部長になり、後継者組織をまとめている。また、荒堀さんは足立区農業委員会会長になり、千住ネギの「命をつなぐ授業として」足立区の小学校6校で出前授業を実施してきた。

荒堀家のご息子が農業を継いで、つまものを栽培出荷している。

★都の農業青年組織のソフトボール大会=、足立が連続優勝するなど、強すぎることから他の組織が参加しなくなり、継続しなかった。

それからは地域ごとの「体力づくり大会」に移行していった。(荒堀氏談)